
テリマ

カシ

Terima Kasih

コタ

バル

Kota Bharu



第5回 鹿児島県青少年海外協力体験事業報告書

鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

はじめに

鹿児島県青少年海外協力体験事業も今回で5回目を迎え、ここにその報告書「Terima Kasih Kota Bharu (ありがとう コタバル)」をとりまとめました。

特に本年度は、第二次世界大戦終結50周年の節目に当たるとともに、日本の国際協力活動の一つである青年海外協力隊の発足30周年という誠に意義深い年でもあります。

このような記念すべき年に、感性豊かな青少年を海外に派遣して、発展途上国で新しい国づくりに活躍されている隊員の方々と一緒に実際の活動を体験し、その援助活動の意義やそこで繰り広げられる隊員と現地の人々との交流、また、学校訪問やホームステイを通して体感した異文化間の相互理解など、成功の内に終了できましたことは大きな喜びであります。

ここに集録された訪問団員の体験の一つひとつが、青少年にとっては大きな意識の変革でもあり、人間形成の芽生えにつながっていく契機になるものであらうと信じます。そして、このような貴重な体験が単に当人たちの記録としてとどまらず、多くの若者に国際交流・国際協力への関心と理解を喚起していただくことを願うものであります。

この事業の実施に御協力いただきました国際協力事業団をはじめ、鹿児島県御当局並びに関係機関団体、同行取材いただきました南日本新聞社、鹿児島読売テレビ放送の方々に厚くお礼を申し上げます。

また、受入れの御支援を賜ったアセアンー日本21世紀友情計画マレーシア同窓会や各機関団体、ホームステイ家族の方々に心から感謝の意を表し、事業報告の御挨拶とさせていただきます。

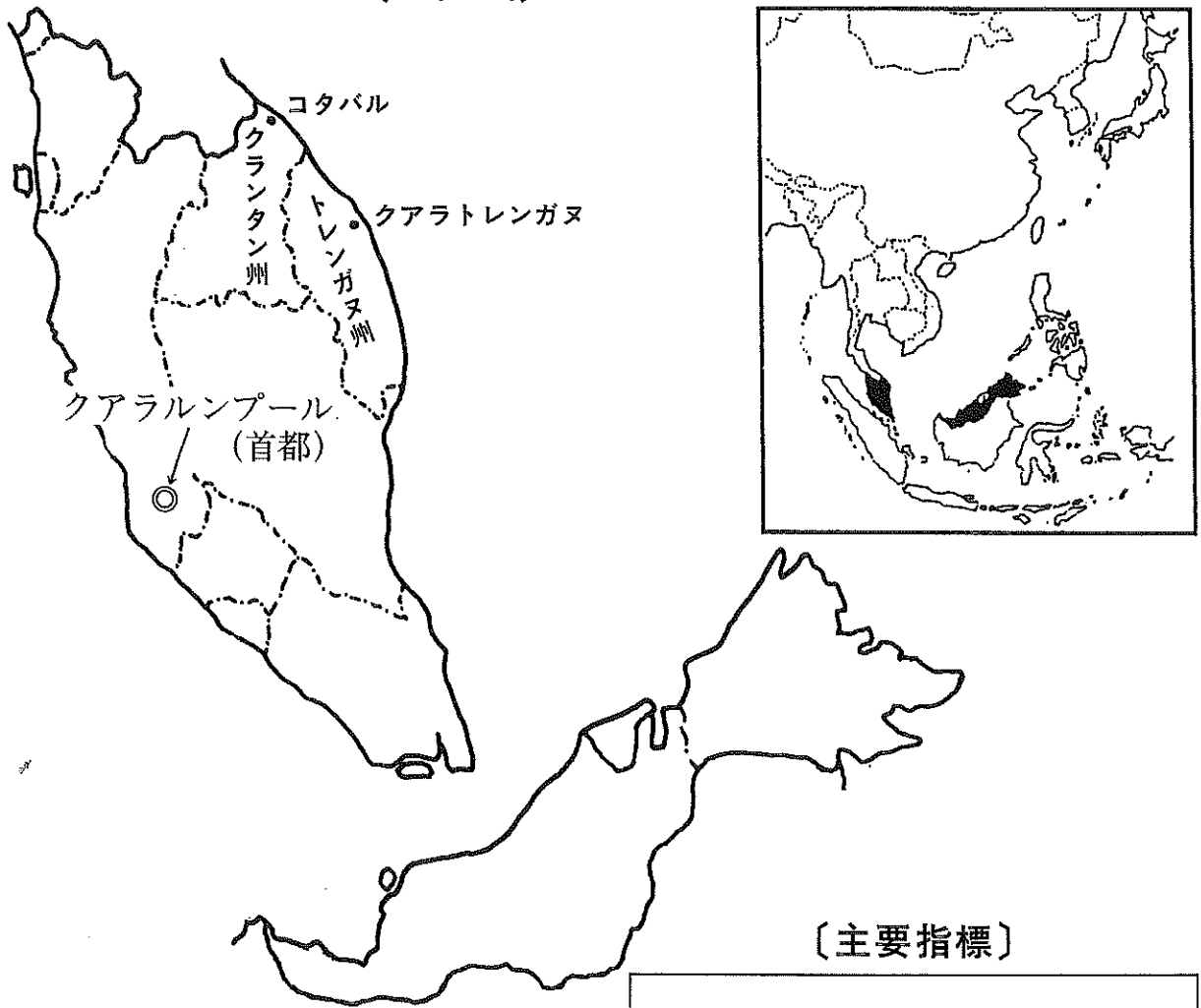
平成7年10月20日

鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

会長 西 広 幸

マレーシア略記

〔位置図〕



総面積：330,434km²

総人口：1905万人（93年）

主要民族：マレー系 54%

中国系 35%

インド系 10%

国民総生産：600億6,100万ドル（93年）

1人当たり国民総生産：3,160ドル（93年）

経済成長率：8.3%（93年国内総生産）

目 次

◆はじめに

◆マレーシア略記

◆ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長 月野 健一 1

訪問団団長

(勲)鹿児島県国際交流協会アジア・太平洋農村研修センター管理事務所長 福迫 正倫 ... 2

◆事業概要 3

事業趣旨

事業主体

訪問団員名簿

訪問日程

◆行動の記録 6

◆訪問手記 14

「心」の発展途上国 田平 奈津美 14

先進国へのあこがれ 川崎 温子 17

イスラムの風習とマレーシアでの体験 佐々木 啓孝 19

「交流」の大切さと青年海外協力隊 日高 あずみ 22

7泊8日の体験記 天瀬 毅 25

「相手からも助けられる」ということ 奈良 憲佑 28

世界を観る 上萩原 純一 30

日本とマレーシアの違いと関係 坂元 祥子 32

「優しさ」と「積極性」 東村 朋子 35

青年海外協力隊にかける夢 永山 桂子 37

◆同行記

第5回体験事業を振り返って

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会監事 橋口 和典 39

◆事業関係の新聞記事 42

《表紙絵・挿絵.....宮園広幸 青年海外協力隊鹿児島県OB会》

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長

月野 健 一

第5回鹿児島県青少年海外協力体験事業の御成功を心からお喜び申し上げます。

この体験事業は、青年海外協力隊の活動現場に本県の青少年を派遣し、開発途上国の人々の新しい国づくりに協力している隊員と一緒に実際の活動を体験するとともに、学校訪問やホームステイにより派遣国の皆さんと交流することによって、国際交流・協力に対する理解を深めることを目的としており、素晴らしい企画であると思います。

皆さんがマレーシアにおいてさまざまな体験をしたことをお聞きすると、国や言語が異なっても、人と人が交流することにより、お互いに理解しあえることができたことを感じます。

また、今年で30周年を迎える青年海外協力隊の活動を体験することにより、国際協力の実際の状況や、国際協力を行うためには何が大切なことなのかを知ることができたことと思います。

今年は戦後50周年に当たりますが、この節目の年にマレーシアを訪問し、戦争とはどのようなものだったのかを知ることによって、平和の大切さを実感することもできたことと思います。

皆さんが今回の体験事業に参加したことは、若い時代における貴重な経験になったことと思います。この経験を一つの糧として今後に活かしていただくことを期待しています。

鹿児島県は、現在、青年海外協力隊の支援、海外技術研修生等の受入れ、鹿児島県の青年の海外への派遣、香港、シンガポール及び韓国全羅北道との交流会議の開催など、さまざまな事業を実施しています。

また、今年の11月には、「第5回日米草の根交流サミット鹿児島大会」を当県において開催し、多数の日本人と米国人が県内各地で交流を行う予定であり、今後も「世界に開かれた南の交流拠点」として国際交流・国際協力を積極的に推進してまいります。

最後に、この事業を実施された青年海外協力隊鹿児島県OB会、鹿児島県青年海外協力隊を支援する会及び財団法人鹿児島県国際交流協会、並びにこの事業の実施に当たり御支援・御協力をいただいた国際協力事業団及び青年海外協力隊の皆さんに心から敬意を表します。

ごあいさつ

訪問団団長

財団法人鹿児島県国際交流協会
アジア・太平洋農村研修センター
管理事務所長 福迫 正倫

地域国際化の時代と言われますように、今や県下各地において地域の特性を活かした国際交流活動が盛んに行われております。

このような情勢を背景に、第5回鹿児島県青少年海外協力体験事業にも多数の応募者が殺到しました。その中から選ばれた10名の青少年は、さすがに国際化への動機付けや目的意識に燃え、彼らを率いるリーダーとして、体験事業の機会を与えられましたことは誠に光栄の至りでありました。

今回の体験事業全般を振り返り痛感してやまないのは、海外での事業の取り組みの難しさでした。現地の受入れ組織との間で、事業趣旨にそった折衝を重ねたにもかかわらず、実施計画の一部に不透明な部分もあり、受入れ国の事情や国民性、価値観の相違など大いに考えさせられました。

現地の事情はともかく、この事業を通じ、単に人々との出会いや友好を確かめ合うといった親善行為にとどまらず、教育・宗教・伝統文化・生活習慣等の違いを乗り越えて異文化に触れ、「日本の再発見と役割の認識」を深めるとともに、青少年の「生き方を問い直す」体験活動をもすることができたことは、何よりであったと思います。

出発に当たって、鹿児島空港での結団式における団員の緊張と不安はつかの間、福岡空港国際線での出国手続や搭乗、そして機内食などすべてが初体験、次第に経験の積み重ねによる充実感と意気込みが感じられるようになりました。

まず訪問地における活動は、アセアンー日本21世紀友情計画マレーシア同窓会等のお膳立てにより、国や州の行政官、村民あがての歓迎式典に始まりました。レジデンシャルスクール体験では、宗教を基軸とした教育理念に基づき、生徒の自主性や校内規律は整然と保たれており、語学は母国語と英語を使い、日本語に意欲的で堪能でした。

今回のホームステイ先は従来の農村地区での集落単位の交流方式と異なり、ホストとの対面式後は団員が州内の都市部に広く散らばり、豪邸でもてなしを受け、団員はそれなりに次元の高い知識や見聞・友情を広めることができました。

また、急成長を遂げる開発途上国で、新しい国づくりに活躍されている青年海外協力隊の活動を体験し、援助活動の意識や協力隊発足30年の歴史の移り変わりの中での協力活動の在り方など、多くのことを学びました。

このような数々の活動を通じて、異なる価値観を持つ人々との交流や異文化間の相互理解を深めることができたことは、この体験事業に参加した全員が経験したすばらしい財産であり、この貴重な経験を一つの糧とし、今後の人生に活かしていただきたいと思っております。

最後になりましたが、本事業の遂行に当たり団員に随行いただきました関係者の御支援・御協力により、有意義な体験事業が得られましたことに感謝し、御挨拶とさせていただきます。

事業概要

事業趣旨

我が国は戦後東南アジア諸国をはじめ、多くの開発途上国に様々な援助を行ってきている。その一つが、昭和40年に発足した青年海外協力隊で、今年30周年にあたる。

そこで、鹿児島県の青少年を開発途上国で国づくりに貢献している国際協力事業団の開発プロジェクト及び青年海外協力隊員の活動の現場に派遣して、その技術援助活動及び隊員と現地の人々との交流を一緒に行い、学校訪問やホームステイ等を通じ、平和の尊さと国際協力に対する理解を深めるとともに、訪問地と鹿児島との親善を図り、国際性豊かな人材の育成に役立てるものとする。

事業主体

- 主 催 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会
- 青年海外協力隊鹿児島県OB会
 - 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会
 - (財)鹿児島県国際交流協会
 - (財)日本国際協力センター
- 後 援 国際協力事業団九州支部・鹿児島県・鹿児島県教育委員会
(社)青年海外協力協会・南日本新聞社・鹿児島新報社
西日本新聞社・日本経済新聞社・読売新聞社・毎日新聞社
朝日新聞社・南海日日新聞社・大島新聞社・NHK鹿児島放送局
南日本放送・鹿児島テレビ放送・鹿児島放送・エフエム鹿児島
鹿児島読売テレビ放送
- 協 賛 (財)古謝育英会
- 協 力 マレーシア大使館・マレーシア航空

訪問団員名簿

(訪問団員)

氏名	学校名	学年	住所	備考
佐々木 啓孝	鴨池中学校	3	鹿児島市	
川崎 温子	桜丘中学校	1	鹿児島市	
日高 あずみ	日当山中学校	3	隼人町	
奈良 憲佑	甲南高校	1	鹿児島市	
上萩原 純一	国分高校	3	国分市	
天瀬 毅	宮之城農業高校	3	宮之城町	
坂元 祥子	鹿屋女子高校	1	根占町	
田平 奈津美	中種子高校	1	中種子町	
永山 桂子	鹿屋農業高校	2	吾平町	
東村 朋子	原田学園 看護専門学校	1	鹿児島市	穎娃町出身

(同行者)

氏名	所属	備考
福迫 正倫	(財)鹿児島県国際交流協会 アジア・太平洋農村研修センター 管理事務所長	訪問団団長
橋口 和典	鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 監事	
西村 直人	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
宮 蘭 夏美	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
有村 英人	(株)鹿児島読売テレビ放送 報道制作部	
平川 順一郎	(株)南日本新聞社 社会部	

訪問日程

平成7年7月30日～平成7年8月6日

- 7月30日(日) 結団式(鹿児島空港出発ロビー内)
鹿児島空港発
クアラルンプール空港着
ホテル泊
- 7月31日(月) 国際協力事業団マレーシア事務所を表敬訪問
クアラルンプール空港発
クタバル空港着
青年海外協力隊員勤務地の学校訪問(Sekolah Menengah Sains
Tengku Muhammad Faris Petra)
学校にて歓迎式・交流会
学生寮泊
- 8月1日(火) 協力体験事業:学校にて授業参加・交流
青年海外協力隊員による協力活動の説明
日本軍上陸地点サバ(Sabak)海岸視察
ホストファミリーとの対面式(Sekolah Menengah Bachok)
ホームステイ
- 8月2日(水) ホストファミリーとのフィールドワーク
クランタン青年会による歓迎式典
ホームステイ
- 8月3日(木) ホストファミリーとのフィールドワーク
ホームステイ
- 8月4日(金) お別れパーティー
クタバル出発
クアラトレンガヌ着
トレンガヌ州州議会議長表敬訪問・歓迎式
クアラトレンガヌ市内のナイトマーケット視察
ホテル泊
- 8月5日(土) JICAシニア協力専門家プロジェクト視察
(Permint Suterasemai Sdn. Bhd.)
JICAプロジェクト(東南アジア漁業開発センター)視察
クアラトレンガヌ空港発
クアラルンプール空港着
PAMAJAとお別れパーティー
ホテル泊
- 8月6日(日) クアラルンプール空港発
鹿児島空港着

行動の記録

7月30日（日）

1日目

日高 あずみ

希望と不安が入り交じりながらも、今日マレーシアに向けて鹿児島を出発しました。これから、7泊8日の研修旅行が始まります。

この事業に応募してから今日までは、本当に短かった様な気がします。「どうしても自分自身で世界を見る目を広げたい。」という願望と、面接の前にマレーシアに関することを勉強していたせいか、みごと十

人の中の一人として、選ばれました。そして、学校の友人や先生方の応援もあり、自信を持って、この事業に参加することができました。

私の一番の目的は、日本と異なる文化や生活を実際に肌で感じ、世界を見る目を広げていくことです。言語が違うのだから、それだけ抵抗があるとは思いますが、自分から溶け込んでたくさんのことを学びたいです。しっかりとマレーシアを見て、素晴らしい体験ができたかと願っています。



7月31日（月）

2日目

川崎 温子

今日は、青年海外協力隊の森永隊員が活動している学校を訪問した。そこでは日本語を勉強している学生がいるので私たちには通訳してくれるアシスタントがいた。私のアシスタントは15歳のハニムさんだ。初めてのマレーシアの人達との会話に私はとてもあせったけれど、彼女の日本語に助けられた。夕方になると学校内を見学しながらジャンケンをしたり、おしゃべりをしてみんなで楽しんだ。

その後、食堂で食事をした。初めて手で食べる食事はポロポロこぼれてうまく食べられなかった。

マレーシアではマンディ（水浴び）をする。私もマンディをした。マンディをする時に巻くサロンと呼ばれる布があるのだ

が、何回巻いてもらってもずれ落ちるので、安心してマンディができなかった。

夜には歓迎会が開かれた。学生のみみんなは日本の歌やマレーシアの歌を披露してくれた。私はフルートを吹いた。その時は、緊張して足がガクガクしたけれど、学生たちと一緒におはら節を踊って盛り上がったので楽しかった。

夜中になると女の子達の部屋でおしゃべりをした。彼女達は日本に興味があるみたいで、日本のことをたくさん質問されて困ってしまった。日本の歌も知っていたのでスキヤキをみんなで日本語で歌った。東村さんのドラえもんの歌は大好評だった。

ここに来た時は仲よくできるか不安だったけれど、思っていたよりもずっと話やすくてよかった。それにたくさんの思い出ができてうれしかった。



8月1日(火)

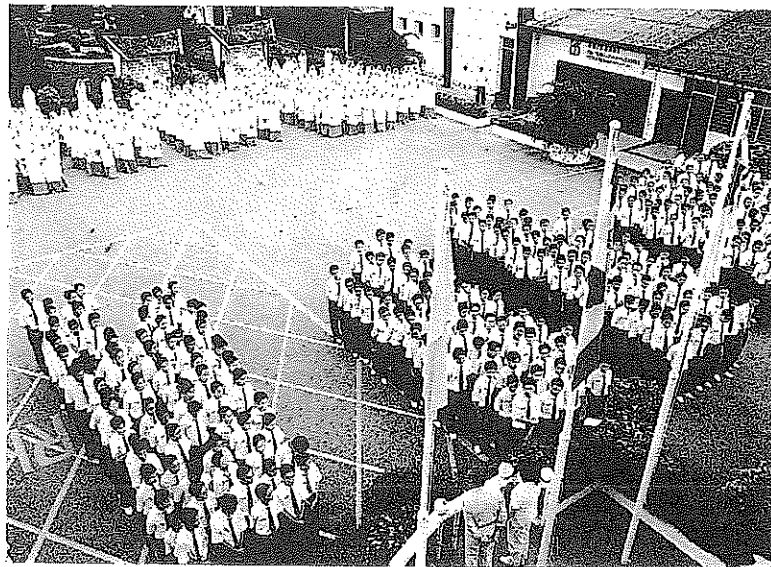
3日目

田平 奈津美

今日は学校の人々との別れがありました。私のアシスタントのリニさんは日本人のような顔つきで、日本語も、とても上手で私は迷惑ばかりかけていました。本当にここの生徒は勉強熱心で感心します。日本語の授業でパートナーだったファイルズ君は、まだ、日本語を習い始めて2年目だと言うのに漢字は書けるし、しゃべることも上手です。もう授業の時の目が違います。私は、日本人の人達に、マレーシアの人々はすごく勉強熱心で、日本人よりもいい所をたくさん持っていると言いたいです。そして私も、勉強が嫌になってきたら、ここの人達のことを思い出すようにします。きっとマレーシアは2020年には、先進国の仲間入りができるなとつくづく思いました。このエネルギーを日本はもっとだすべきだと思います。

さて、ホストファミリーとの対面式は盛大でした。学校での民族舞踊が炎天下のなか激しい踊りを見せてくれました。ここでは、地元の小さい子から老人まで参加してくれたので感動し、また目頭が熱くなりました。

私のホームステイ先の家族はとても人数が多いです。今日は祖父の家にステイしました。とても広い部屋で一つ下の子とダブルベットと一緒に寝ています。私の家よりきれいでびっくりしました。ご飯も気を使ってくれて、スプーンなど用意していましたが、手で食べました。学校よりおいしく感じました。その後は私の出身地の種子島の紹介をして、折り紙をしました。鶴の折り方を覚えていたので、一緒に挑戦しましたが、久しぶりにした折り紙だったので、他の色々な折り方を忘れてしまい、うまく教えられなかったのが残念です。子供達は千代紙を見て、「Cantik(きれい)」と言ってくれました。



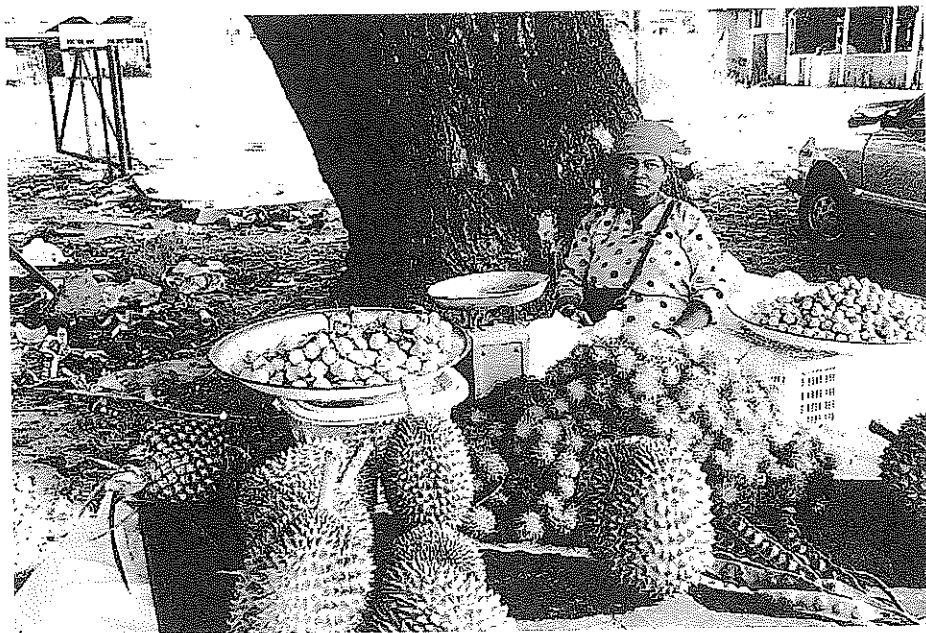
8月2日(水)

4日目

東村 朋子

ホストファミリーとの一夜を過ごし、二日目ともなると徐々に不安は消えていきましたが、ホストは私のことをやはり、日本から来たお客様のようにしか思っていないように思えます。いろいろと家族の人に気を使ってもらっているようで、少し、複雑な気持ちでした。今日は、公民館で歓迎パーティーがありました。他の団員と会うと、日本語のみで通じるので、ホームステイの

家族のことを忘れ、話が盛り上がってしまい、彼らのことを思うと申し訳ない気持ちになってしまいました。彼らは、私達が日本語で話していると、何を言っているのかわからないわけですから、とても悪い事をしたと後悔してしまいました。あと一日しかありませんが、そういう気持ちを抱かせるような行為は慎もうと思いました。歓迎パーティーでは、クランタン州の伝統的な音楽や民族舞踊を見ることが出来ました。



8月3日(木)

5日目

奈良 憲佑

今日、僕はホームステイ先のお母さんと一緒に、彼女の学校を訪問しました。お父さんの学校では先生方よりも生徒達と沢山会話をしたのですが、ここでは、先ず職員室へ行った為、先生方と話をする機会が多かったです。歴史の先生は、僕に日本語を教えて欲しいと言って来ました。その先生に日本語の説明をしているうちに、僕は何がだかわからなくなってしまい、つくづく、日本語の難しさを知りました。14:00頃になると学校の授業が終了し、お母さんと一緒に帰宅しました。

昼食後、お父さんは僕を Pantai (海岸) へ連れて行ってくれました。そこはとても綺麗な海岸で、僕は初めてココナツのジュースを飲みました。それから、パティック (ろうけつ染め) の工場や、魚のすり身をフレーク状にする工場へ連れて行ってもらいました。

また、お父さんは、おばあさんの家まで行き、彼女を紹介してくれましたが、彼女は、にこにこ笑っているだけでした。今日は多くの人との出会いがありました。こんなに親しくなった人々と明日は、別れなければならないと思うと、非常に悲しくなってきます。



8月4日(金)

6日目

永山 桂子

今日でホームステイも終わりだった。お母さんがボロボロ泣いていて、私まで泣きそうになった。ワニとお父さんとお母さんが見送りに来てくれていた。お母さんが泣いているのを見ていたら、もう少しこのコタバルにいたいと思った。やっと家族にも食事にもなじめたし、英語の勉強にもなるし。でもそれ以上に、もっとここの人達とこの土地、この国のことを知りたいと思った。テレビのニュースを見ていても日本のことがよく報道されていたし、広島・長崎のこともみんながよく知っている。マレーシアの人はそれだけ日本に対する関心が高い。でも私はマレーシアで戦時中にあったことや、マレーシアの文化・習慣についてほとんど何も知らなかった。今回のホーム

ステイでは初めて見るものばかりで、めずらしいと思う反面、何も知らないということをととてもはずかしく思った。日本に帰ったらもっとマレーシアについて勉強しなければと思った。

最初、ホームステイに入る前に考えていたのとは生活・言葉面がかなり違った。言葉や習慣、宗教の違いがあって大変だったこともあるけど、「心と心で通じ合う」と言うことが少しだけわかったような気がする。それに、どこへ行っても歓迎会や交流会を開いてくれて、みんなで日本人の私達を向かえ入れてくれたことや、言葉のわからない私達に親切にしてくれたことを、一生忘れないでいたいと思った。

コタバルを出てからクアラトレンガヌの海の近くのホテルに着いた。ずっと遠浅の海だった。夕日がとてもきれいだった。



8月5日(土)

7日目

坂元 祥子

今日はシニア協力専門家の五島皓さんの職場と、東南アジア漁業開発センターを訪問しました。最初、五島さんの事務所へ行き、シルクのパティックやスカーフを作る工場を見学しました。五島さんは養蚕から洋服を作るまでを担当しているそうです。ペイントの仕方は、布の上に約50℃のろうでペイントをして、色を塗って乾いたら熱湯で洗うと、ろうが白く綺麗になるそうです。まゆがマレイシアでは採れにくいそうで、輸出したいができないんだそうです。

しかし、だいぶ日本のまゆのような種類に品種改良しているそうです。

次に東南アジア漁業開発センターに行きました。センターは、1967年12月、地域国際機関として設立され、現在の加盟国は、全7か国だそうです。今年のプログラムでは、1か月間公海で色々な調査をするそうです。この2つのJICAの施設を見学した後、KLに移動して、セントラルマーケットに行きました。ポストカードを買ったりしました。そして今まで色々とお世話をしてくださった人達とお別れをしました。泣いてしまいました。1週間ではなく、もう少し一緒にいたかったです。



8月6日(日)

8日目

上萩原 純一

不安と期待で胸が一杯のまま、飛び立って行った鹿児島空港に再び帰って来た。到着ロビーを出た途端、家族の人達の、「おかえりなさい」の言葉が、とても新鮮な感じがした。

今までの事を振り返ると、いろいろな事があった。いや、あまりにもありすぎた。それは私自身が撮った写真を見て言える事だ。――街中にたたずんでいる美しいモスク。国境を越えて友情を深めた学生達。何

から何まで御世話になったホームステイ先の家族。マレーシアでの最後の夜に、共に歌を歌い合ったPAMAJAのメンバー等。そこには、私達が体験したそのままだが写っている。

マレーシア研修に参加できて私は本当に良かったと思う。この研修で自分が得た事を今後の生活や、将来に生かすことができたならば、今回の自分の主旨である「世界を観てみたい！」は十分に達成できたと思う。



訪問手記

「心」の発展途上国

田平 奈津美

(中種子高等学校1年)

私の夢は福祉関係の仕事につき、そこで身につけたものを青年海外協力隊員になって広めていくことだ。だから、今回私がこの研修旅行に参加した理由は「青年海外協力隊の活動を見て、自分の夢に近づこう」と思ったからである。

正直に言って、今までのマレーシアのイメージは教科書に出てくる発展途上国そのものだった。しかし現実は逆だった。やはり田舎に行けば、私の想像と類似する風景もあったが、都市部などは2020年に向けて開発が進んでおり、私にはものすごいエネルギーが感じられた。

「そのエネルギーが「人」にもあるなと感じたのは、クランタン州の学校を訪問した時だ。全寮生のその学校の歓迎パーティーで生徒のみなさんが、一生懸命踊り、歌なども発表してくれたのだが、私は今までこれほど熱く感動した演技を見たことがなかった。彼らには、全然「恥ずかしい」というそぶりが見られないのだ。逆に僕を見てくれ、僕の歌を聞いてくれ。そんなエネルギーがホール全体に広がって、なんとも言いようのないくらいだった。逆に私達の出番になると、声が小さいとか、特に私はなんだかんだとオドオドして、結局曲をま

ちがえてしまったりと、日本人の「恥ずかしい」時にでる典型的な癖のようなものが出てしまった。パーティーの後私は、「みっともなかったな」と後悔の気持ちで一杯だった。

次の朝の全校朝礼では、生徒さん達の立派に国歌を歌う姿に、今までの学生生活で真面目に校歌を歌ったことがあまりない私も含めて、私の周囲の人達を思い出した。中学に入った頃、全校朝礼で校歌を歌わない先輩に、何故歌わないのかと尋ねると、「恥ずかしいから」と、そんな答えが返ってきた。ここでも「恥ずかしい」だ。日本の学生は、もちろん全員とは限らないが、「恥ずかしい」という鎖に縛られて、なにもできなくなりつつあるのではないかと、少し恐ろしく感じる。

また、中高等学校の日本語クラスで、青年海外協力隊の森永隊員の授業風景を見て



厳しいと思ったが、生徒さん達はしっかり顔を上げて先生を見つめていた。私の中学校の時の記憶では、外国語の授業はみんなうつむいていて、数人しか顔を上げていない光景しか浮かんでこない。この授業で、私とペアを組んだファイルズ君は、私に質問する時には必ず日本語、答え方がわからなくても英語をすぐには使わずに、隣に聞いてでもちゃんと日本語で返してくれるのでうれしかったし、偉いとも思った。質問も、最初は緊張してなかなか出なかったけれど、慣れるとどんどん質問してくれたが、私はなかなかなじめず、緊張ばかりしていた日本でのALTの授業を思い出した。

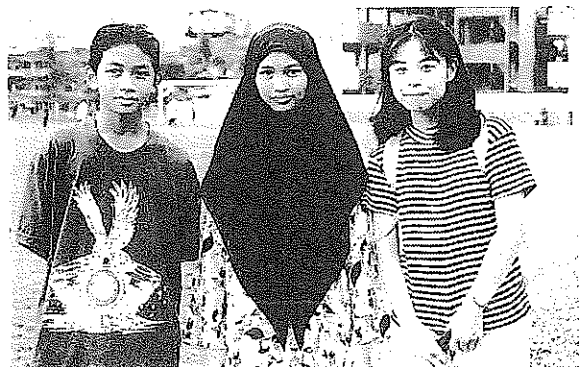
ホームステイの歓迎パーティーでは、マレーシアの人達の積極的な行動に驚いた。日本人ならば、もし外人を見かけたら、「すごい外人がいる」などと言うだけで近づこうとはしないだろう。それは、英語が上手に話せないからでもあるが、マレーシアの人達だって同じだ。私達と話せるくらい日本語を話す人は少ない。結局、私達は心を開いていないからだ。心を開いて自分を知られるのが怖いから、自分自身に自信がないと思い込んでいる人が多いからだと思える。私だって、もちろん自分に自信があるとは言えないけれど、心を開いて損をすることは無いと思うようになってきた。

しかし、私はあまりにも日本を知らない自分に驚いてしまった。ゆかたの着付けをはじめ、一番マレーシアの人達に失礼だったのは、今から50年前、日本人がマレーシアに上陸して虐殺などしていたことを知ら

なかったことだ。すごく恥ずかしいことだと思った。上陸した海岸に見学に行った時、説明する森永隊員が目、教頭先生の目がとても悲しい目をしてたのを覚えている。また、ステイ先のおじいさんに、別の上陸した海岸へ連れて行ってもらった時も、おじいさんの悲しそうな目に、私はたまらなくなり何度も謝罪した。おじいさんは「気にするな」と言ってくれたが、私の頭の中には、「JAPANESE SOLDIER」という言葉がやけにくっついて離れなかった。

1週間を通して私は一つの言葉を思いついた。それは「日本は心の発展途上国」と言うことだ。これは、今すでにそうなっているのではなく、そうなりつつあると思うのだ。歓迎パーティー等ですごく感動したのも、日本のことをあまり知らず、知ったかぶりをしてたのも、心が貧しかったからだだったのが少し関係しているのかもしれない。

これから私は何をすべきか、それは私と同じ様に心の貧しい人々に心を開いて、自分の心の貧しさを知ってもらうことだと思える。最初、人々を助ける人になりたくてマレーシアを訪れたのに、逆にマレーシアの人達から、多くの事を学び、また、いろん



な場面で、助けてもらうことが多かった様な気がする。「心の発展途上国」から「心の先進国」へ、私の夢と共に実現しようと思う。お世話になったマレーシアの人々に、「Terima kasih (ありがとう)」と心を開いて言いたい。



先進国へのあこがれ

川崎 温子

(桜丘中学校1年)



1995年7月30日、私は青少年海外協力体験事業の団員の一人として、青年海外協力隊が初めて派遣された国の一つのマレーシアに7泊8日の日程で行くことになった。この研修で、青年海外協力隊の活動をじっくりと見学し、この経験を将来に生かせるようにがんばろうと思った。

国際協力事業団のマレーシア事務所を訪問した。そこの所長から、お話を伺うことができた。所長は女性で、とてもえらい方だと聞いて驚いてしまった。マレーシアの協力隊員は女性の方が多いらしいので、これからは女性もがんばる時代だなと思った。青年海外協力隊は昭和40年に発足し今年で30周年にあたり、これまでに15000人以上の方が派遣されたそうだ。協力隊の活動部門は、農林水産、教育文化、加工、保健衛生などがあり、職種もさまざまだが、日本語教師として活動されている方も多いようだ。

私はそこに来て初めてシニア協力専門家という名前を聞いた。シニア協力専門家と

は40歳以上の経験のある方のことで、そのシニア協力専門家の五島皓さんが活動されている養蚕工場を訪問した。そこでできたシルクは質が良く、とてもきれいだとは思ったのだが、五島さんは、まだ問題点があると言う。一つ目は、まゆの中のさなぎが病気で死んでしまい、まゆが変色してダメになってしまうこと。病気の原因はまだ分かっていないらしい。二つ目の問題点は、まゆを糸にする時、耐久性が弱いため糸が切れてしまうこと。だから、なぜまゆは病気になってしまうのか？ どうしたら糸を切らずに巻くことができるのか？ これからもっと研究して、もっと質の良い絹ができるように五島さんにここでがんばってほしいと思った。

その後、東南アジア漁業開発センターを訪問した。そのセンターで働いている柳川さんのお話を伺った。

団員の一人である永山さんの「マレーシアではカメの保護をしているけれど、店で卵が売られているのはなぜですか？」

という質問に柳川さんは「数の多いカメの卵は数を制限して売っているみたいですね」

と答えて下さった。私も永山さんと同じ疑問を持っていた。カメの肉は食べてはいけないのに卵はOKなんて何かおかしいと思

う。それにたくさんニワトリの卵があるのに人間のわがままで数を制限してまでカメの卵を食べることはないと思った。施設の中には

「あなたの捨てるゴミでカメを死なせないで」

と書いてあるポスターが張られていた。話しによると、死んでしまうカメが多いそうだ。原因はポスターに書かれている通り人間のゴミだ。人間が捨てるビニールぶくろを、カメが好物のクラゲと間違えて食べてしまい死んでしまうのだ。人間の手で汚されていく海に住む生き物に対して私は、申



しわけなくなっていました。

日本語教師の森永隊員が活動しているコタバルの学校を訪問した。森永隊員はヒゲをのばしているのので、すっかりマレーシアになじんでいるような印象をうけた。森永隊員の授業を受けたけれど、みんなとても楽しそうに勉強をしているし、森永隊員の

ことを信頼しているみたいで、私も受けながら、日本語を一生懸命勉強している学生を見て、たいへん感動した。

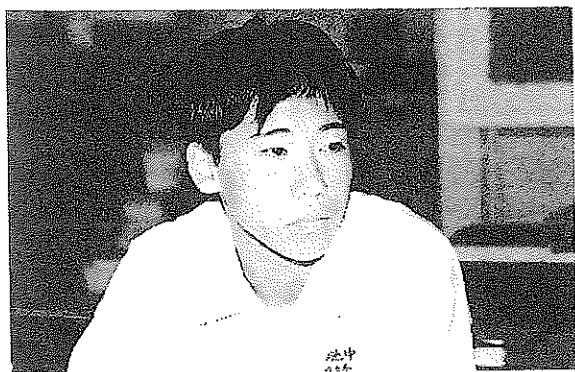
私がこの研修に参加して一番心に残ったこと、それは交流をした学生のみんなが、いつか日本へ行きたいと言ってくれたことだ。マレーシアの人と接して、いつも感じることは日本にとっても関心があるということだ。テレビや新聞では毎日のように日本のことを話題にしているし、みんな、日本の言葉、日本の会社、日本の歌までも知っている。私はそのことにとても驚いてしまった。それに比べて私は、マレーシアのことをあまり知らない。だから私はそのことが心苦しく思えてしまった。今、マレーシアでは2020年までには先進国の仲間入りをしようとがんばっている。それはマレーシア人と話しているだけでも感じられるほどだ。マレーシアの子供は日本の子供と違い、人見知りせず人なつっこい。それは、これからの他国との友好親善にも大きく役立つだろうと言われている。今のマレーシアを見ていると2020年が来る前に、先進国の仲間入りをしてしまうのではないかと思う。これからはもうマレーシアに、協力隊は必要ない。という時代が早く来るようにもっとがんばってもらいたい。

イスラムの風習とマレーシアでの体験

佐々木 啓孝

(鴨池中学校3年)

私が1週間のマレーシアでの国際交流を通じてまず最初に興味を持ったものは、イスラム教の風習のことでした。なぜイスラム教の教えに興味をもったかという、マレーシアの人々が、生活の中に、イスラム教をとり入れているからでした。日本人は主に仏教を信仰しているけれども、現在の若い日本人のほとんどは、生活の中に仏教というものがかかわるということはほとんどないと思います。このように宗教というものが日常生活にほとんどかかわらない生活をしてきた私は、イスラム教がマレーシアの人々の日常生活に与える影響がどのようなものか、とても興味を持ちました。



私はマレーシアへ行く前に、イスラム教の教えについて少し勉強しました。イスラム教のさまざまな教えの中でも例をあげると、1日に5回メッカの方を向いて祈らなければいけない、というものや、左手は不浄なものとされ左手で物を食べることは禁止されている、ということや他にも、食生活の面ではアルコール類、豚肉、動物の血

液などは食用を禁止されている、といったことなどいろいろな教えがありました。またこのイスラム教の教えを勉強し、イスラム教の教えはとても生活に密着したものだということを感じました。

私はイスラム教の風習を実際にホームステイを通じて体験することができました。夕食のときは右手を使って食べ、これが難しく、ポロポロこぼしながら食べました。他にもお酒を飲む店がまったくないといったことでイスラム教が地域、日常生活に与える影響を学び、そして感じることができました。

私はイスラム教を実際に体験してこう思います。イスラム教は昔の社会にとっても密着した宗教だということです。昔はスプーンやフォークもないし、豚肉も食べたら危険だったと思います。だから昔の社会にはとても適応した教えだと思います。しかし現代社会では生活も変り、イスラム教の教えが適さない部分も出てきていると思います。私はマレーシアの人々にイスラムの教えをすこしずつ変え、もっと文化的な生活をしてほしいと思います。そして私はこのマレーシアとの国際交流を通じてイスラム教、イスラム教の教えの下での生活を少しだけでも体験できて、とても勉強になり、学ぶことも多かった様な気がします。

私はこのマレーシアでの交流、体験を通

じて日本とマレーシアの経済や政策、目標のことについて知ることができました。私たちは、クアラルンプールにあるJICA事務所を訪問し、話を聞いたり、実際に青年海外協力隊の活動を見たり、苦労したことなどを聞くことで、国際協力の意図や目標を理解することができました。

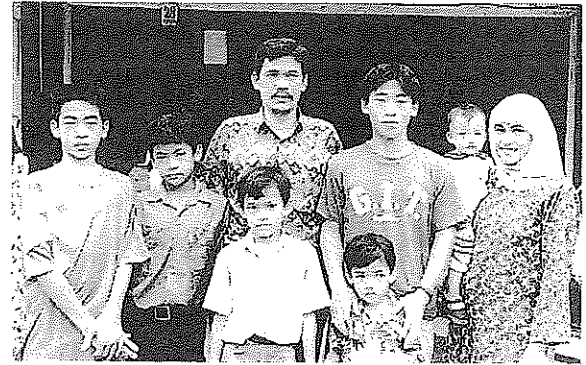
私達は、青年海外協力隊の森永隊員の日本語の授業で、現地の学校の生徒と一緒に勉強したわけですが、今自分が普通に話している言語を勉強するというのは何か複雑な思いと、うれしさがありました。

森永隊員は、私達を第二次世界大戦の最初に日本軍が上陸したという海岸に連れて行ってくれました。この海岸には、戦争当時の面影は全く残っていませんでした。森永隊員とマレー人の教頭先生は、第二次世界大戦中のことを説明したボードを使って、当時のことを話してくれました。第二次大戦中、日本軍がマレーシアで行なったことを聞いた時、私はとてもはずかしかつたし、第二次世界大戦を説明したボードがきちんと作られていることから、大戦中日本軍、戦争、がマレーシアに与えた影響を感じとることができました。また同じまちがいをくりかえすことのないようにするのは、私達若い世代だということも感じました。

JICAのプロジェクトも、私達は見ることができました。私達が訪問したバティック工場ではシニア協力専門家の五島さんという人が、ここで養蚕の技術を伝え、活動していて、五島さんはこの活動を通じての苦労話や目標を私達に話してくれました。

五島さんによると、マレーシアで技術を伝えるということで最初苦労したことは、言葉が通じなくて相手にいろいろなことが伝わらなかったことだそうです。養蚕の面での苦労は、今は少しずつ良くなってきているけれどやはり、生糸の質が悪いということでした。理由は、かいこの病気、内部汚染、糸が切れやすい、などさまざまな問題があって苦労しているそうです。五島さんはいずれ日本にシルクを輸出したいと目標を話してくれました。

次に訪問した東南アジア漁業開発セン



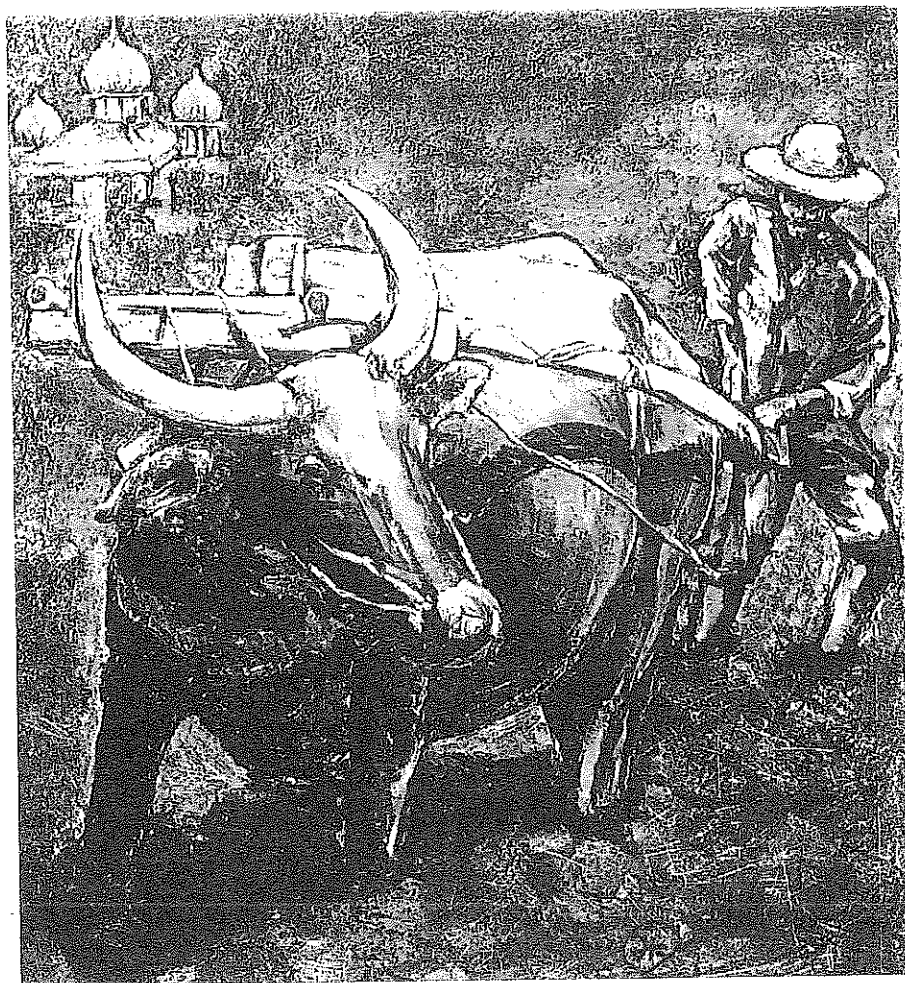
ターという所では柳川博士がここでの活動内容を話してくれました。ここでは水産資源の調査、海洋環境調査などを行っているということでした。これからの予定では、マレーシア東海岸、タイ沖の海洋調査を日本と協力して行うそうです。マレーシアでは海ガメの保護は数種類しか行われておらず、海ガメの卵は市場などで普通に売られています。私はこの問題はどうかならないものかと思いました。地域の人達の生活などいろいろ問題はあるだろうけど、海ガメの保護を全種類にわたり行ってほしいと思いました。

私は青年海外協力隊やJICAの活動を通じ、青年海外協力隊の一人一人が、マレイ

シアと日本，日本と世界の国々との国際協力，国際交流の貢献者なのだということを強く感じました。

私がこのマレーシアでのさまざまな体験を終え思うことは，これからもっとこのような国際交流の機会が増えていき，そして

もっと世界が身近に感じられるようになるということです。私は青年海外協力隊の活動，ホームステイ，マレーシアに残る戦争の傷跡，体験した全部をこれからの役立て，機会があればまた国際交流に関係していきたいと思っています。



「交流」の大切さと青年海外協力隊

日高 あずみ

(日当山中学校3年)

青年海外協力隊一途上国の発展のために、現地へ行き技術を教え援助すること。社会科でこう勉強しました。その時、私が思ったことは、「自分も協力隊のような手助けをしたい」ということでした。しかし実際は、どのような活動をしているのか、どうすれば協力隊員になれるのか…。まったくと言っていいほど、その内容を知りませんでした。だから、この体験事業に参加できたことは、青年海外協力隊の活動を知る上でも、貴重な体験となりました。

マレーシアは面積33万km²、人口約1800万人が住んでいる国です。熱帯地方なので気温は高いと思っていましたが湿気がないせいか、鹿児島ほど暑くは感じませんでした。マレーシアは、マレー系・中国系・インド系など、さまざまな人種の集まった国です。私達が信仰する宗教と彼らの宗教は当然違います。ですから町を歩く人を見ても、服装は多種多様でした。私のホームステイ先では、イスラム教を信仰していました。御飯を食べるのも右手で行います。指先にのせた御飯を、親指で押すようにして口に運びます。素手で食べることにそれほど抵抗はなかったものの、難しくてポロポロこぼしてばかりでした。お風呂も日本とは異なっていました。マンディといって、サロンという大きな輪になった布を体に巻いて、水を浴びる方法です。どちらとも初

めての経験ですし、とても興味がありましたので、慣れないにも拘らず挑戦しました。日本では、絶対にできない体験でした。

ホストファミリーの歓迎ぶりには驚くば



かりでした。外から帰ってくると、必ずと言っていいぐらい、飲み物とお菓子を用意してくれていました。お客様にはそういったもてなしをするのが、こちらの礼儀だそうです。それにしても飲み物の甘さには、弱りました。ホストファミリーの家には、4・6・8歳の子供がいました。ホームステイ最初の日、折り紙の折り方を教えてあげたら、とても喜んでなついてくれました。日本の伝統的な遊びの、こま・竹とんぼ・お手玉も一緒にしました。あいにく、こまは回せなくて、できないでいたら、近所の子供が簡単に回して見せてくれました。あとから聞いた話では、こまはクランタン州の伝統的な遊びとしてあったのだそうです。「マレーシアの遊びを教えて」というと、チョンカという遊びを教えてくれ

ました。遊びを通じてでも、マレーシアのことを知ることができたし、日本のことも知ってもらえていい交流になりました。

私が一つ気になった点があります。それは地図で鹿児島を指した時、「ヒロシマ・ナガサキ」と聞かれたことです。日本軍が上陸したコタバルに住んでいる人達にとって、戦争は忘れがたいものなのかもしれません。日本は今年で戦後50年を迎えます。日本だけが被害を受けたわけではありません。マレーシアに被害を与えました。ですから、戦争を通じてでも、お互い考えていく必要があります。そのマレーシアが、「日本を見習う」といった形で立ち上がっています。その援助として協力隊が活動している、と考えるのもいいと思います。

コタバルの学校には、日本語教師として



活動している鹿児島出身の森永隊員がいます。大勢の生徒といるのを見ると、とてものびのびとして見えました。森永隊員の話しでは、「教えることより、教わることの方が多い」この言葉を聞いた時は、何のことかさっぱり分かりませんでした。しかし、協力隊の活動を見てきた今では分かります。教える、と言う立場に立つのではなくて、同じような生活をし、溶け込むこと

で初めて理解しあえるし、生きた援助ができるのではないかと感じました。だからこそ、教わることが多いのだと思います。森永隊員の生き生きした生活を見ていると、『あっ、いい仕事なんだな』と思えてなりませんでした。

クアラルンプールにある、JICAマレーシア事務所も表敬訪問しました。その話しの中で印象に残ったのが、「マレーシアは、2020年までに先進国の仲間入りをする」という言葉でした。身近な日本や韓国から知識を学び、今では中進国です。ずっと発展途上国だと考えていた私にとって興味を持った言葉でした。そのためには、都市部ばかりではなく、広い地域に関しても発展させなくてははいけません。そのために協力隊もいろいろな方法で援助しています。建設・農業・看護など、その数は160以上あると聞き驚きました。こんな仕事にはあこがれてしまう私ですが、協力隊員として派遣されるまでは大変だそうです。例えば、マレーシアが看護婦を必要とする場合、そのことを日本大使館へお願いし、全国へ応募があります。その中で選ばれた人が研修を終えたのち、派遣されるのだそうです。とても時間のかかることだと、初めて知りました。これまでに54カ国に1万5000人もの人が派遣されたのだそうです。こういったことに興味がありながらも、その内容をよく知らなかった私にとって、この経験は本当に貴重なものとなりました。今までは、青年海外協力隊というと、一方的に技術を教え発展のために援助するものだと思っていたわけですが、実際には違い

ました。彼らは完全にマレーシアの生活に
溶け込んでいました。技術を教えるだけで
なく、人と人との交流を大切にしていま
す。これは私が実際に、肌で感じたこと
です。この体験で交流の大切さと楽しさを

り、外国というものを一步身近に感じられ
るようになりました。この経験をこれから
の生活に生かし、世界を見る目をどんど
ん広げていきたいです。



7泊8日の体験記

天瀬 毅

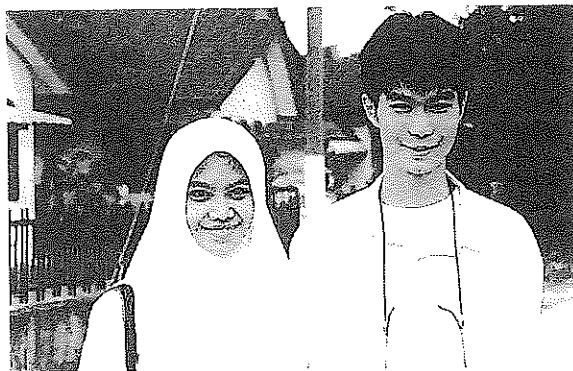
(宮之城農業高等学校3年)

7月30日、私達10名の団員は、鹿児島空港で結団式を終え、福岡経由でマレーシアの首都クアラルンプールに到着しました。現地に着いて、高層ビルが沢山立ち並んでいるのを見て、私が想像していたマレーシアとは異なっており驚きました。マレーシアを、一部のマスコミは発展途上国と報道していますが、その国自体を見てみると本当のことは、わからないと思いました。

翌日私達は、JICAマレーシア事務所を訪問しました。ここで所長さんから協力隊員の活動内容についてくわしく教えていただきました。マレーシアは、現在、マハティール首相により、2020年には先進国の仲間入りをしようとする運動が始まっているそうです。またマレーシアでは、どれくらいの方が協力隊員として活動しているのか、そして、どのような職種があるのかも説明してもらいました。

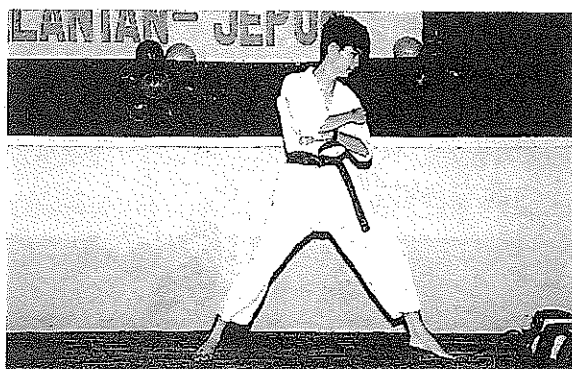
次に、鹿児島出身の協力隊員で日本語の教師として派遣されている森永昭彦隊員の勤務する学校に行きました。学校に着いて私達は、森永隊員や、日本語クラスの学生達から歓迎をうけ、食堂に通されました。軽く食事をとってから、日本語クラスの学生と一緒に校内を見学しました。運動場では、学生が、セパタクローをしていましたが、一緒に競技する勇気の無かった私自身が、残念でなりませんでした。私は歩きな

がら学校の事や部活動についての話を聞きました。しばらく歩き回り、夕食をとり再び食堂に行きました。ここで、初めての手で食べることを体験し、神秘的な気持ちになりました。最初はなかなか上手くいきませんが、食べているうちに少しずつなんとか手で食べられるようになりました。夕食のあと、全校生徒で歓迎会を開いて下さり、おたがいに出し物を披露し、私は、空手の型をしました。そして、学生達は、マレーシア伝統のシラットや国歌を歌ってくれて、日本語クラスの生徒も、日本の歌を合唱しました。



次の日、私達は森永隊員の協力隊員としての活動を見学することになりました。私は、協力隊員になるのが夢ですので森永隊員の活動が見れると思うとワクワクしました。森永隊員は、私達が日本で学ぶ英語の授業と同じように、絵や図などを見せたりして、発音の仕方を教えていました。授業の途中で、学んでいた学生達とグループを作り、お互いに自己紹介などをしてみんな

なの前で日本語を使って発表しました。森永隊員の活動を見終ってから、私達は、それぞれの教室に分かれました。私が、受けたのは、物理の授業でした。マレー語の授業だったので理解するのに大変でした。物理の先生は、女性の教師でスライドを使ったり、実験をしてわかりやすく説明してくれました。その後、日本語教室で、森永隊員と同じ様に、日本語教師として勤務している、山上りえ隊員から私達に日本のことをいろいろと質問されました。私は、日本についてうまく説明できませんでした。もっと日本について勉強しなければいけないと思いました。



午後からは、ホームステイ家族との対面式でした。私を受け入れて下さったのは、カマルザマンさんという方でした。対面式を終えてから車で自宅に行きました。家は街の中にあり自宅では、奥さんと一緒に一歳になる女の子が出迎えてくれました。三人家族でした。私はかたことのマレー語や英語を駆使し、自分の名前や日本について話し交流を深めましたが、中には、通じない言葉もあり、紙に絵を描いて筆談したりジェスチャーを使ったりしました。意味が通じたと思った時は、とてもうれしかったです。

ホームステイの二日目、カマルザマンさんの経営している精米工場に連れて行ってもらいました。精米工場では、社員の人にいろいろと案内され、精米の工程や機械などについて説明してもらいました。私が、珍しいと思ったのは、ボイラーを利用して精米する機械を動かしていたことでした。精米したあとの糠は、燃していましたが、その時、別の社員が「この糠を何か利用できないか」と質問してきたので、私は「日本では、漬物用として利用されている」と答えました。以前から外国の農業などについて知っておきたかったので、ここでの見学は今後の自分の勉強に役立つと思いました。

それから博物館やタイとの国境などにも連れて行ってもらいました。

ホームステイ最後の夜は、カマルザマンさんがお別れのパーティーをしてくれました。奥さんは、私のようにハシを使って食事をしたいと言って、私と彼女二人は、ハシを使って食べました。楽しく会食した後、お世話になったお礼を言ってプレゼントを渡しました。すると、奥さんが泣き出して、私も涙があふれてきそうでした。3泊4日のホームステイも終わり、カマルザマンさん一家と別れて今度は、クアラトレンガヌに向かい、私達はJICAプロジェクト施設で、シニア協力専門家として養蚕の分野で活動している五島さんの工場に行きました。

五島さんに連れられて工場内を見学しました。主にシルク製品を作っていました。工場内では、女の人達がシルクに絵つけを

していました。絵つけの材料や出来上がった製品について五島さんが説明して下さいました。五島さんの話しによると、マレーシアのカイコは、まゆになったら中のさなぎが死んで、まゆが汚れたりするなどの問題があるそうですが、五島さんや工場内の人達の努力により改善されてきているそうです。私の学校も昔、養蚕をしていたので、この話しには、興味がありました。

五島さんの工場をあとにして、もう一つのプロジェクト施設に向いました。そこは東南アジア漁業開発センターです。ここでは、海ガメの生態や海水の成分および養殖について研究しているそうです。柳川博士に、活動内容や施設についての話しをしてもらいました。施設内には、いろいろな機材や資料がありました。コンピュータールームには、マレーシアの海水温度や漁獲量がグラフなどで映しだされていて、研究

の様子がよく分かりました。海ガメなどの保護については、世界中の人々と協力し合っているそうです。7泊8日の中でホームステイをしたり、JICAのプロジェクトを見学したりした自分にとって、長くもあり、短くもある研修でした。JICAとは何かこの研修に参加してはじめてわかった様な気がします。

また、協力隊活動だけでなく、国際交流や人とのふれあいなどを通して、人間として大切なことも学びました。そして、日本に帰ってきた今でもマレーシアでの思い出が頭をよぎり、いつまでも強く心に残っています。

この研修は、私にとってよい思い出にもなり勉強になったと思います。これからは、この研修で学んだことを活かしてがんばっていきたいと思います。



「相手からも助けられる」ということ

奈良 憲佑

(甲南高等学校1年)

マレーシアについて、出国前の僕は、ほとんど何も知りませんでした。

ただ東南アジアと言えば、発展途上国というイメージを持っていたため、クアラルンプールの町並みを見たときは、本当に驚きました。なぜならそこには、近代的な建物が建ち並び、建設中あるいは、完成した高層ビルが建っていたからでした。

ここは、僕の考えていた国とは、全く別の国でした。

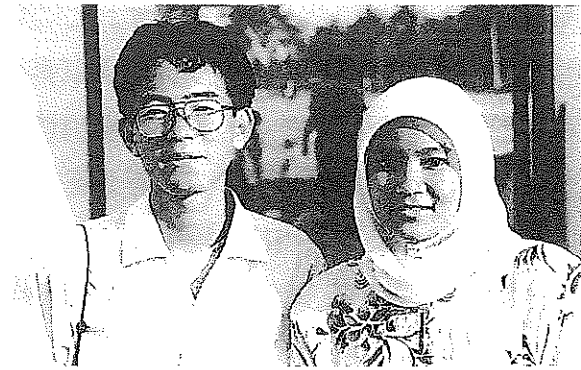
サイムダービーにあるJICAのマレーシア事務所に行き、この国のことを聞いてまた驚きました。なんとマレーシアは、2020年には、先進国の仲間入りをしようと頑張っているというのです。

今まで、東南アジアと言えば、発展途上国で遅れた国が多いと思っていましたが、実はそうではなかったのです。

2020年には、先進国になるために頑張っている。しかもそれは、決して無理な話しではなく、先の見えた話しで、僕の偏見を取りさるのには、十分でした。

クランタン州での学生との交流で、気づいたこともありました。それは、僕と同年代以上の方は、みんな英語が上手であるということと、マレーシアの学生いや、マレーシア人は、日本人の持っている、初対面の人とはあまり口を聞かないという習慣を持っていないということでした。

英語を話すのは、学生だけでなく、日本で言う田舎の御爺さんも、マレー語と英語の2か国語が話せるというのには、驚きました。何故なら、日本の田舎の御爺さんが、2か国語を話すなんてことは、まずありえないからです。

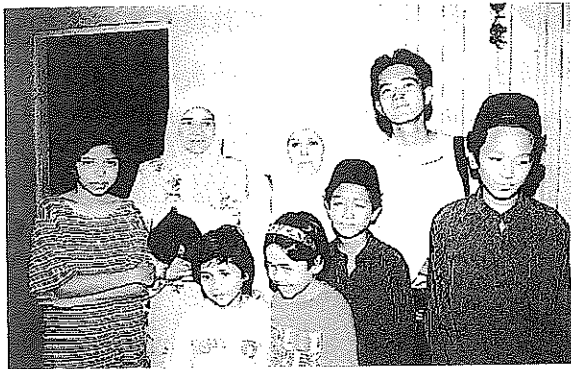


僕は、初対面の人から気軽に話し掛けられた時は、驚きました。しかし、考えて見ると、初対面の人に気軽に話し掛けられないという点は、何処をどう見ても、短所だと思います。その短所のない彼らを日本人は、見習うべきだと思いました。JICAのプロジェクト見学では、トレンガヌ州に行き、シニア協力専門家として活動していらっしゃる五島さんに、マレーシアの民族衣装の様な物で、バティックというものの製法を説明してもらいました。最初にろうで、絵柄の下書きをするというのは、不思議でしたが、これは、最後に熱湯で洗う時に、その熱でろうの下書きが取れるからでした。

さらに、五島さんの活動は、養蚕の技術を教えることだと聞かされました。

バティックの工場の次に、東南アジア漁業開発センターへ行きました。

柳川博士の話では、このセンターは、この辺りの海の海洋環境調査と、水産資源調査を行うためのものだと言うことでした。



ここでの説明で、一番心に残った言葉は、漁師がお金をもらって漁業の技術を身につけているという言葉でした。

最後に、初めに行った学校で、日本語を教えている森永隊員から、協力隊として、お手伝いをしようと思ってやって来たのに、助けられているという言葉聞いた

時、その時は、聞き流したわけですが、今思い出してみると、なんとなく分かるような気がします。

僕は、奉仕活動について何か知識を得ようと思ってこの事業に参加しました。

しかし、今振り返ってみると、少し修学旅行気分でしたような気がします。

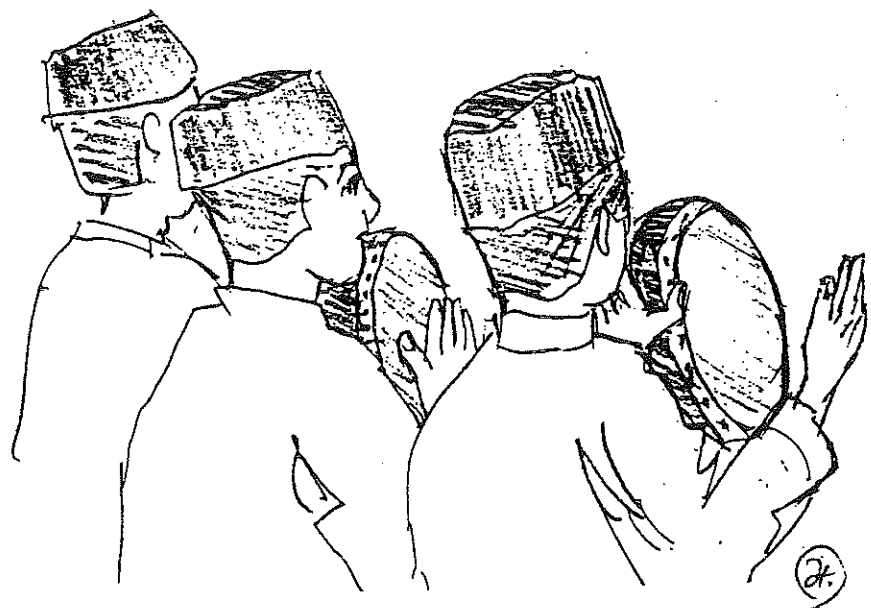
また、この旅行で自分の欠点なども見えてきました。例えば、定時に遅刻してしまうとか、一つの物事に集中すると、他のことが見えなくなると言う事などです。

その他もふくめて、今後は、明らかになった自分の欠点を改善していきたいと思っています。

僕は、奉仕活動について、この体験で一つ大きなことを学んだと思います。それは、自分が相手を助けるだけでなく、相手からも助けられるということです。

僕は、このことこそが、奉仕活動の志を支えるものだと思っています。

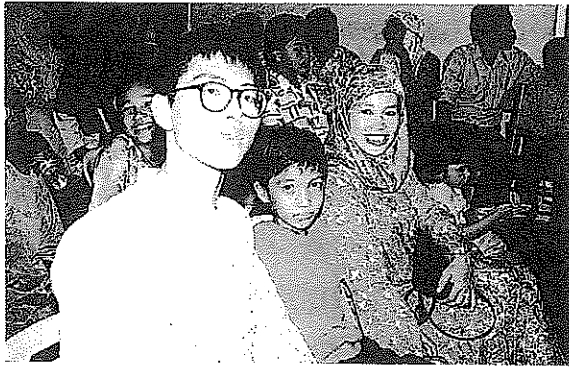
この体験を通して、僕の夢に向かって努力していくつもりです。



世界を観る

上萩原 純一

(国分高等学校 3年)



8月6日の夜。

それぞれの思いを胸に秘め、私達は鹿児島を久しぶりに踏んだ。1週間という長いようで短いような期間で、全てとまではいかないが、それでも同じアジアの一国であるマレーシアを自分の目で観ることができ、とても感動的であった。

このマレーシア研修に行くにあたって私は、『食』について調べようと思った。なぜなら、この小さな島国である日本にも、地域によって様々な名産・郷土料理があるからだ。例えば、京都の鯛そうめん・北海道の鮭の親子飯・沖縄のごやーちゃんぶる・奈良のかんぴょう御飯・鹿児島のおったいぼ・大阪のこいこく・富山のばたばた茶等。そして、『食』は、人間が生きていくのに必要な要素の一つである。日本でこれ程バリエーションがあるのだから、ましてやマレーシアの食べ物はどうなものがあるのか、どんな味がするのか、私には全く想像がつかなかったからである。ほんの一部しか調べていないが、ぜひ紹介したい。

○グレペッ…パイ生地のようなものを揚げたもの。カレーに近い味がした。

○クトパァ…ササに包まれたちまきのようなものが、中に入っていた。

○カルプッ…塩せんべいにちょっとくせのある味と歯応えが加わったもの。

○ランブータン…ライチより一回り大きく、赤くて、根か茎かどうか分からないものがたくさん生えている。割ってみると、白色の果実であった。強くかぶりつくと、種の皮が実についてしまい、食べるのに一苦労した。

○ドリアン…『果物の王様』といわれているが、とにかく臭い。食してみたところ、とても果物とは思えない味がした。三口目ようやくドリアンらしい味がした。

○バナナ…手のひら程度の小さな型だった。私の滞在先で、朝・昼・晩と一番よく出された食材。

○飲み物…私のホームステイ先の家では、ミルクティーが多く出された。いただいてみると、甘い！ と

でも甘すぎた。パンやおやつには合うが、御飯には合うものではなかった。

○主食…ホームステイ先での朝は、たまにパンの時があったが、大体の主食は御飯だった。食べ方は、器に盛ってあるおかずをのせ、混ぜて手で食べるというシンプルなものである。

実際にマレーシアに行ってみて、やはり



『食』文化の違いに驚いた。しかし、屋台で魚料理を食べた時、あまりの辛さに汗がでてきて、早く日本の味を味わいたいと思ったこともあった。

わずか1週間足らずで日本が恋しくなった自分にとって、青年海外協力隊員の存在はとてたのもしいものを感じられた。一マレーシアのシルク製品に力を入れ、また繭の品質の向上にも力を入れておられ、

自分以上に活力に満ちておられた五島シニア協力専門家。優秀な学生達が集う学校で様々な絵を使ったり、素晴らしいテキストを使い、楽しい口調で日本語を教えておられた森永隊員。そして、その他の隊員も、いきいきと活動をしていることだろう。もし、青年海外協力隊員になることを望んでいる人は、ぜひ不屈の精神を持ってください。紹介させていただいた隊員の方々も、いろいろな困難を乗り越え、今日に至っていると思う。脆弱な精神を持った自分が、わずか1週間で音を上げたのが良い例である。また、不屈の精神と共に大きな夢を抱くのも忘れないでください。

今回のマレーシア研修には私は、「世界を観てみたい」という自分自身の主旨の下で参加した。世界を観たいといっても、アジアという地域の一国しか観ていないが、自分には十分すぎるものであった。SMST MFPで出会った学生達。お世話になったホームステイ先の家族。優しかったPAM、AJAのメンバー。一生懸命働いていらっしゃる協力隊の方々。「世界を観てみたい」という主旨は、「人を観てみたい」と同じである。



日本とマレーシアの違いと関係

坂元 祥子

(鹿屋女子高等学校1年)

マレーシアに到着して、すぐに気づいたことは、「緑がとても多い」ということです。鹿児島市内もわりと緑が多いわけですが、クアラルンプールの方が緑は多く、整然としている様に感じられました。沢山の人が住んでいる中で、こんなに緑が沢山あると、都会でも、新鮮な空気を吸収できるような気がしました。もう一つは、マレーシアに行く前、私は、発展途上国と聞いていたので、日本の方が建物とか道路とかが綺麗なのかな。と思っていたら、日本と同じ位綺麗で、こんな近代化している国に、日本からの協力は必要ないのでは………と思いました。



7月31日に、JICAマレーシア事務所を訪問した時、マレーシアのことについて色々説明を受けました。マレーシアは現在、発展途上国でもなく、先進国でもない、「中進国」で、2020年には、先進国化、工業化したいので、首相自らが、「日本に学べ」と宣言して、地方の開発、工業化の促進、環境への配慮など、色々な分野

に力を入れ、これらで不足している所などを、日本から派遣されている青年海外協力隊や、シニア協力専門家の方々が、協力や指導をしているそうです。でも私は、説明を受けた時、青年海外協力隊の活動は、なんとなく知っていたけれど、シニア協力専門家の方々は、何を指導したりしているのかなど、全然わからなかったし、シニア協力専門家という名前も知りませんでした。シニア協力専門家というのは、40歳～70歳未満の方々に、派遣期間は約1～2年だそうです。私は、説明を受けて、その活動内容を知り、施設を見学したいと思いました。

日本とマレーシアの違いは沢山ありました。

一つは、色々な宗教があり、色々な人種がいることです。イスラム教を信仰しているマレー人が約50パーセント。キリスト教、仏教を信仰している中国人が約30パーセント。ヒンドゥー教を信仰しているインド人が約15パーセント。その他の宗教を信仰している人々が約5パーセントいるということ。そして、宗教によって使う言語がそれぞれ違うこと。例えば、マレーシア語、タミール語、ヒンドゥー語、英語、中国語などで、日本では見られないアラビア文字を使った看板もありました。それらを聞いたり、見たりして、日本にも色々な

人種や宗教があるけれど、世界には、もっと沢山人種や宗教があるんだな。と思いました。その時、ここは日本じゃないんだと改めて感じました。

二つ目は、政治・経済です。政治や経済のやり方は、もちろん日本とは違います。しかし、政治と経済では、政権を握っている人種が違います。日本みたいに内閣や国会は日本人だけというのではないのです。まず、政治は、マレー系、経済は、中国系だそうです。私は、日本と同じで、マレー人が経済を握っているのかと思っていたけど違ったので驚きました。

三つ目は、国王とスルタンがいることです。日本の天皇制の様なものではなく、スルタンは、13州のうち、9つの州に一人ずついて、5年の当番制で国王になるそうです。そして、スルタン=政治・経済ではないそうです。私は、ここが日本との大きな違いだなんて思いました。当番制とは考えもつきませんでした。現在は、一回りして、ヌグリ・スンビラン州のスルタンが国王となっています。

JICAの施設やシニア協力専門家の活動も見学しました。

まず、シニア協力専門家の五島皓さんのバティック工場を見学しました。そこでは養蚕からバティックまでを五島さんが指導しているそうで、話を聞くと、まゆの育て方からが大変で、まゆの中が汚れたり、採る時期が早いと、糸が切れたりするので、輸出をしたいけど採れる量が少ないこともあり、できないそうです。しかし、五島さんの成果でだいぶ品種改良されているそう

です。できあがったバティックを見ると、とても丁寧で綺麗でした。やっぱりシルクは価値が高いだけあって、それだけ苦勞と努力があるのだと思いました。



次に、東南アジア漁業開発センターを訪問しました。センターは、1967年12月、地域国際機関として設立され、現在の加盟国は、日本・マレーシア・タイ・シンガポール・フィリピン・ブルネイ・ベトナムの7か国です。今年から1か月間公海で、色々なことを協同調査するそうです。時期は、モンスーンの前と後で、サバ・サラワク沖、フィリピン沖・ベトナム沖で調査を行うそうです。資金は、土地や建物、人件費（全体の約2割）が、マレーシア政府から（この資金はマレーシア国民の税金から）で、機材費（残りの約8割）などは、日本のODA（政府開発援助）から出ているそうです。ここは、機材とかとても沢山あるし、設備も整っているし、1年でも2年でも早く先進国化してほしいと思いました。そのため、日本も色々なことに協力しないといけないと思いました。

学校の寮にも宿泊しました。学校には青年海外協力隊の森永隊員と山上隊員が、日本語教師として活動しています。私には、学生の一人スアルニさんという女性がアシ

スタントとしてついてくれました。彼女はとても日本語が上手でした。私は、日本語の授業とマレー語の授業を受けました。森永隊員は、一生懸命生徒に日本語を教えていましたし、生徒も一生懸命授業を受けていました。夜はスアルニさんからサロンをかりて、一緒にマンディをしたり、写真を撮ったり、話をしたりと、とても楽しかったです。

そして、3泊4日のホームステイもしました。思ったより、裕福な家庭で子供と遊んだり、買い物に行ったりと、とても楽しかったです。言葉はあまり通じなかったけど、なんとかコミュニケーションがとれて良かったです。フルーツなどの食べ物が甘く、おいしかったけど、最後まで食べれなかったのが果物の王様といわれているドリアンでした。

私は、日本とマレーシアは、あまり親密な関係でないのでは………と思っていたけれど、JICAや青年海外協力隊などを通して、とても親密な関係であるということがわかりました。

マレーシアがこれから早く先進国化できるように日本も協力していかないといけないと改めて思いました。

この1週間で、色々なことを体験して一番印象に残った所は、JICAの施設の東南アジア漁業開発センターとホームステイです。ホームステイ先の家庭とは、深く長い交流を続けていこうと思っています。

この事業に参加できたことで、一生の思い出が出来、良い経験にもなりました。

この1週間とても楽しかったです。お世話になった方々に、どうもありがとうございました、とお礼を述べたいです。



「優しさ」と「積極性」

東村 朋子

(原田学園看護専門学校1年)



私がこの体験事業に参加しようと思ったのは、将来看護婦として青年海外協力隊員として活動できたらと思っているからです。そしてこの体験事業で、現在のマレーシアでの看護体制や、病院内の構造、施設設備などを見学してみたいと思ったからです。今回、JICAマレーシア事務所を訪問した時、私は、マレーシアの看護体制について質問しようと思ったのですが、現在マレーシアには看護婦として派遣されている隊員はなく、私が知りたかったこの国の看護活動の内容などは、あまり詳しくは聞くことができませんでした。しかし、看護婦が派遣されていないということは、看護体制においても衛生面等においても充実しているからではないかと思いました。少し気になったのが、マレーシアには障害者の学校が少ないのではということです。たとえ少数であろうと、必要なものにはかわりないので、そういった人々のことにも力を入れてもらいたいと思いました。また、現在のマレーシアの状況の説明もしてくださ

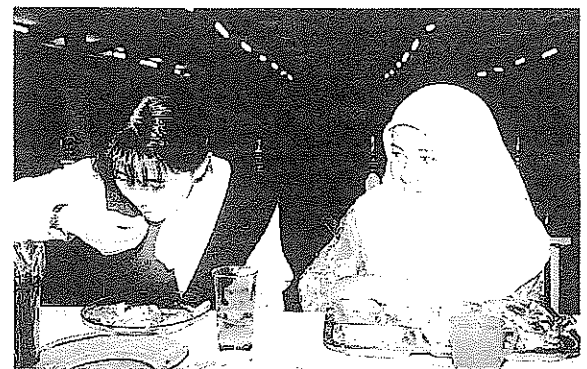
り、その中で一番驚いたことは、マレーシアの首相が日本の政策等を学び取り入れ、2020年には先進国への仲間入りを国民とともに目指している、と聞かされたことでした。私のなかには、やはり、マレーシアは発展途上国というイメージしかなかったのですが、ピンとくるものはなかったのですが、首都であるクアラルンプールを見ると納得させられるものが数多くありました。また地方への発展に力を入れているが、環境への配慮も忘れずに行っているという話も、実際に訪れてみると目で確かめることができるくらいでした。更に、青年海外協力隊の事についても、30年の歴史があり、過去や現在の活動内容等々を詳しく説明して下さいました。協力隊員は、世界各国へと様々な職種別に派遣されているようで、少し前までは男性が80に対し女性は20位だった隊員の数の割合が、現在では50対50にまでなっている話を聞いて、女性の進出がこういった所でも表れているのだと驚きました。また、この後に訪れた、日本語教師やシニア専門家の活動内容などについても詳しく説明してもらい、私にとってはとても充実した話を聞けたと思いました。

私達は、日本語教師として活動している森永隊員の学校を訪れ、マレーシアでの文化や生活習慣等にも触れながら、活動を見

学、体験させてもらいました。彼らは、全寮制の中高等学校に派遣されており、子供達に少しでも分かりやすく理解のしやすいように色々と工夫をして日本語を教えているようでした。私がここの生徒達と溶け込むことができたのは、生徒さん方の強い積極性と、やはり彼らの活動のおかげで、日本語が少しは通じることができたからなのだ実感しました。私はここで「分からないことがあったら私にではなく生徒に聞いて下さい」という森永隊員の言葉に最初は、戸惑いましたが、私達のためを思い人を頼るのは簡単だが、それでは自分の身に入ってくるものは少ないんだと自覚させられました。また、ほんの少しの努力によって、言葉以上に通じ合えるものもあり、できないものはないんだという風にも考えることができるようになりました。森永隊員らは、日本語を教えるだけではなく、教師として人間形成にもおおいに力を入れているのだと思いました。

「また、先生だけでなく生徒達もかなり積極性があり、また私達がお世話になったホームステイ先でもそうだったのですが、マレーシアの人々が、日本の事をもっと詳しく知ろうとしている姿を見て、みんなが2020年に向けて一生懸命になっているなと感じました。その2020年に向けて、青年海

外協力隊やシニア専門家の方々の活動の努力もあるのだなと思いました。それは、シニア協力専門家として、養蚕を担当している五島さんの事務所を訪れた時に、蚕の品質改良を行い、日本への輸出を考えていると聞かされた時でした。現地の人々と共に色々な努力、工夫をし、勉強を重ね、マレーシアの発展のために頑張っているのだと思われました。



この7泊8日の体験事業で、私を参加させてくれた方々、現地で色々とお世話になった方々、多くの人々に感謝しています。私は、自分なりに多くの方々から人の優しさや、積極性、自主性など色々な事を学ぶ事が出来ました。この体験で、今はまだ私はこう変わったとは言えることは出来ませんが、これからの自分の生き方に学んだことを取り入れ、今後の自分に活かしていこうと思っています。実り多い体験ができて、とても良かったと思います。

青年海外協力隊にかける夢

永山 桂子

(鹿屋農業高等学校 2年)

「獣医師になる」という私の小さい頃からの夢に、「青年海外協力隊に参加する」というのが加わったのが、高1の夏休みでした。きっかけは、「鹿児島県高校生国際交流」に参加したことでした。

1泊2日という短い期間ではありましたが、青木氏によるミャンマー語の会話の練習や、三人の外国人との座談会を通しての交流会、青年海外協力隊OBの小牧さんと北田さんの協力活動の内容や、現地での体験談を聞いたり、とても充実していました。

そのとき心に残ったのが、青年海外協力隊OBの二人の方の話でした。協力活動や現地の人々との交流、生活等のことを話した後、「青年海外協力隊に参加してよかった」と二人とも言われました。それを聞いてから私は、発展途上国といわれる所で自分の技術を生かす仕事をする事ができ、現地の人と共に生活し、一緒に一つのことに打ち込むことのできる青年海外協力隊に魅力を感じるようになりました。

それに、私の小さな頃からの夢でもある獣医師も青年海外協力隊の160の職種の中に含まれていることを知って、『私も将来は獣医師として青年海外協力隊に参加したい』と思うようになりました。

ですから、今回海外協力の活動を実際に見学できたことや、JICAのマレーシア事

務所の所長さんや、シニア協力専門家の五島さん、東南アジア漁業開発センターの方々と直接お会いし、お話を伺うことができたのは、私自身にとって大きなプラスになったと思います。

JICAでは、所長さんから青年海外協力隊のマレーシアでの活動内容について説明がありました。



今、マレーシアでは「ルック・イースト政策」といって、日本から学ぼうというもの、2020年には先進国の仲間入りをしようという二つの政策があります。そのために日本語を学ぶ生徒も多く、日本語教師の隊員が21名と多かったです。コタバルで日本語教師として活動している鹿児島出身の森永隊員の学校へ行って、彼の授業風景を見学させてもらったあと、森永隊員の行う日本語の授業を学生達と一緒に受けることができました。日本語の授業を「外国語」として受けるのは初めてのことでした。簡単な日本語を分かり易く説明することを難しいと感じ、また、日本語をととても新鮮に感じ

ました。

次に、クアラトレンガヌでは、シニア協力専門家の説明も受けました。私はこれまでシニア協力専門家の存在を知らなかったもので、私の両親と同じ年か、それ以上の年齢の人達でも海外協力に参加したいと思う人がいることや、その人達の活躍する場所が作ってあることにとても驚きました。8月5日にシニア協力専門家として養蚕の一貫経営の技術指導を行っていらっしゃる五島さんの所へ見学に行きました。経営上の問題点として、まゆの品質が悪いことや絹糸の耐久性が弱いこと、くわの収穫量が低いことの三つを挙げていました。それらを改善するために、通風の調節をして温度管理を行ったり、くわに肥料を与えたり、除草を行ったりしていて、少しずつ品質はよくなってきていると話して下さいました。

「これからは質の良い物を日本へ輸出したい」と言っておられましたが、もし問題点が全部改善されて、良い品が日本へ輸出されるようになれば、日本の養蚕農家はなくなると思います。なぜなら、低コストで多量生産ができるので、消費者がどんどん安くて良い品を手に入れることができるようになるからです。

そのあと、東南アジア漁業開発センターにも見学に行きました。

マレーシアでは長い間、水産資源などの調査を行っていないので、水産局と大学生の人達と調査協力を行う計画があるそうで

す。

今回見学した中から、本を読んだり話を聞いたりするだけでは得られない貴重なものを沢山得ることができました。また、これから努力していくべき点も見つけることができました。

今まで国際交流や国際協力の興味を持っていましたし、海外のことも少しは知っているつもりでした。でも、初めて海外へ出てみて、自分の持っている知識と語学力が、思っていた以上にちっぽけなものだと思い知らされました。



これからは、発展途上国とよばれる国々の概要や、くらしの様子について学びたいと思います。それに、青年海外協力隊やシニア協力専門家の、発展途上国での協力活動やその国に多い職種のことをもっと知りたいです。

獣医師になるための勉強や、英語など、まだまだ勉強不足ではありますが、いつの日か今回マレーシアで学んだことを生かし、獣医師として青年海外協力隊の活動に参加するという夢を必ずかなえたいと思います。

同 行 記

第5回体験事業を振り返って

鹿児島県青年海外協力隊を支援する会

監 事 橋 口 和 典

JOCV発足25周年を機に、全国に先駆けて始まった鹿児島県青少年海外協力体験事業は、今年で5年目を数え、私にとっては、4回目のマレーシア訪問、初めてのクランタン州でのホームステイ、そして、5回目の体験報告書の作成となりました。

今回の訪問地クランタン州の州都コタバルは、1941年に旧日本軍が上陸した地点（パンタイ サバ）でもあり、多民族国家マレーシアの中でも特にイスラム色の強い地域です。住民の90%以上がマレー人で、さまざまな民族の行き交う首都クアラルンプール（KL）と違い、色とりどりのトゥドゥンで頭を覆い、バジュクロンやバジュクバヤと言ったマレーの民族衣装に身を包む女性や、サロン姿の男性が数多く見受けられました。

KL到着の翌日、私達はJICAマレーシア事務所を訪れ、水田所長より、マレーシアの東方重視政策（Look East Policy） WAWASAN2020 JOCV及びシニア協力専門家の活動状況 JICAプロジェクト等の説明を受け、星形のドームを持つ国立回教寺院を見学して、夕刻コタバルへと向かいました。団員達は、コタバル近郊のレジデンシャルスクール SMSTMFPでの歓迎式に臨み、寄宿舎に一泊したのち、鹿児島出身の森永昭彦隊員の日本語クラスで学校の生徒達と一緒に日本語の授業を受けました。「教えることよりも、教わることの方が多い」と言う彼の言葉に、最初は当惑しながらも、その言葉の持つ本当の意味を帰国後彼等なりに理解し、見つけ出した様です。また、パンタイ サバを訪れ、教頭先生によるレクチュアを受けた彼等は、(Japanese Soldier) と言う響きが頭の中から離れずに、「何も知らなかった自分が恥ずかしい」と感じ、戦争と平和について改めて深く考え直したようです。今年は戦後50周年。パンタイ サバは打ち寄せる波音が、ひっそりと静まり返っていました。

ホストファミリーとの対面式は、コタバルの南東10kmに位置するバチョックの学校SMBで行われました。鉦や太鼓・笛のリズムに合わせ、手足をゆっくり動かしながら、祈るような踊りが続くマレー拳法シラットと、青空高く舞い上がるマレー風ワウの歓迎を受けた私達は、KLからはるばるこの式典のためにおいでになったと言う、官房副長官 モハマッド ナズリ氏より一人ずつ名前を呼ばれ、ホストファミリーと対面、3泊4日のホームステイが

始まりました。

クランタン州にとって、日本からの公式の訪問団を受け入れるのは初めての事で、ホームステイ先は、コタバル、パシールマス、バチョック、パシールプターと広域になり、高床式の家屋が、椰子の木の下に立ち並ぶ光景を想像していた団員達は、眼前の大理石やブロックとコンクリート造りの平土間式住宅に戸惑いながら、緊張と不安の一夜を過ごしました。ホームステイ二日目からは、古い王宮などを建て直した博物館めぐりを通して、歴代スルタンや王室、凧やソケットなどのクランタン州の手工芸品、イスラム教に関する諸行事や調度品、そして、戦争について学びました。また、地元の小学校や中学校での学生との交流、水田や精米工場・果樹園の見学、クランタン青年会による歓迎式典、ホストファミリーとのお別れパーティーを経験しました。異なる文化・習慣・価値観の中での貴重な体験は、彼等にとって一生忘れることの出来ない素晴らしい財産となりました。

続いて訪れたのは、長く美しい海岸線を持つトレンガス州。州都クアラトレンガヌでは、州議会議長を表敬訪問し、にぎやかな夜のパスールも見学しました。山積みされたおびただしい数のドリアンに辟易する団員もいましたが、一方ランブータンは大人気でした。翌日、JICAシニア協力専門家の五島皓さんから、養蚕、シルク製品、バティックについての説明を受け、次にJICAプロジェクト施設の東南アジア漁業開発センター（SEAFDEC）を視察しました。クアラトレンガヌのSEAFDECは1992年に設立され、海洋環境調査と水産資源調査を行っている、と柳川博士より聞かされましたが、団員達は、海ガメの保護にもっと力を入れて欲しいと願っている様子でした。

JICA専門家の派遣は、1955年に始まり、第1回から現在まで、33,000人を超える専門家が途上国に派遣されています。

マレーシア最後の夜のエピローグは、思わず…アラビアンナイトの世界…と思わせる様な、ライトアップされた官庁街を通り、ムルデカ広場でのPAMAJA（アセアンー日本21世紀友情計画マレーシア同窓会）のメンバーとのサヨナラパーティーでした。

「いつまでも絶えることなく友達でいよう」

の合唱が始まると、団員達は、目頭が熱くなり、親切にしてくれた彼等への感謝の気持ちで一杯でした。

7泊8日のマレーシアでの体験の中で、団員10名は、急速に工業化が進み、都市化の進展も著しい首都KLのエネルギーに圧倒されました。そして、東海岸コタバルでは、イスラム教とマレーの伝統文化を大切にする人々との触れあいがありました。また、技術移転を通じて、社会経済開発に取り組むJICA専門家や、現地の人々と生活、仕事を共にしながら地域の社会、経済発展に貢献する青年海外協力隊員にも接することが出来ました。彼等の中に

は、協力隊員の姿に自分自身の将来像を重ねて見ていた団員もいました。今年は協力隊発足30周年。すでに15,000人を越す隊員が派遣されています。私は、近い将来、団員の中から協力隊員として任地へ赴く日がやって来ることを心待ちにしています。

最後に、今回の事業に御協力、御支援をいただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。そして、この体験報告書が多くの人々に読まれますことを切望いたします。

社会部日誌

七月末から約一週間、マレーシアを訪ねた。旧日本軍がハワイの真珠湾よりも先に上陸した地、コタバル。戦後五十年がたった今、住民たちが日本に対してどんな感情を持っているのか、不安があった。現地の人みんな、旧日本軍がどんな行動をしたか、学校でつぶさに学んでいる。日本人はそれだけのことを知っているだろうか。話を聞いて恥ずかしくなった。それでも救いだっただけのは、彼らの言葉。「過去のことだよ。一緒に未来のことを考えよう」

(順)

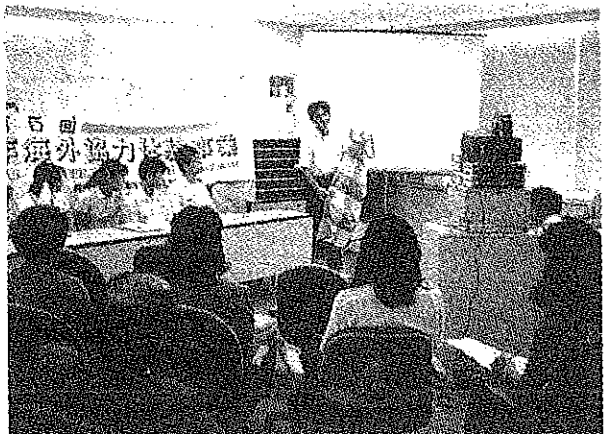
マレーシア研修の
 中高校生らが帰鹿
 海外協力体験事業
 マレーシアでの一週間の
 研修を終え六日夜帰鹿した
 第五回鹿児島県青年海外協
 力体験事業(青年海外協力
 隊員OB会など主催)の一

行が七日、南日本新聞を訪れ、帰国報告した。
 一行は団長の福迫正倫・アシア太平洋農村研修センター所長と県内の中高生ら十人で、七月三十日に鹿児島を出発。首都クアラルンプールのJICA事務所を表敬訪問したほか、クランタン州コタバルの学校で、日本語教師として活躍している県出身の海外青年協力

隊員・森永昭彦さんの活動を視察。また、同州で民泊しながら現地の学生らと交流を深めた。

「心の豊かさ感じた」

海外協力体験 鹿児島県 中高生ら帰国報告会



県国際交流協会などが主催する「第五回鹿児島県青年海外協力体験事業」のマレーシア訪問団(福迫正倫団長)の帰国報告会が二十七日、鹿児島市の国際交流プラザで開かれ、県内の中高生ら十人が保護者らにマレーシアでの体験や感想を報告した。

今回は県内の中高生ら十人が七月三十日から八月六日まで、タイとの国境に近いマレーシアの東海岸クランタン州などを訪問。ホームステイしながら交流を深

マレーシアでの一週間の体験を説明する団員27日、鹿児島市東千石町の国際交流プラザ

.....

め、現地で活躍する青年海外協力隊らの活動を見学した。

福迫団長らのあいさつの後、団員らは一人ずつ現地での生活ぶりなどを発表。「貴重な体験を今後の自分に生かしたい」「人々の心の豊かさを感じた」「将来は協力隊になりたい」などと語った。

PENYEBAR FIKIRAN RAKYAT

Utusan

M A L A Y S I A

UTUSAN MALAYSIA KHAMIS 3 OGOS, 1995

Suasana harmoni kebanggaan rakyat

Oleh HAPIZH AZIZ.

BACHOK 2 Ogos — Perpaduan dan kerjasama pelbagai masyarakat majmuk dalam mewujudkan suasana aman dan harmoni merupakan kebanggaan sebenar rakyat di negara ini.

Timbalan Menteri di Jabatan Perdana Menteri, Datuk Mohamed Nazri Tan Sri Aziz berkata, keunikan masyarakat pelbagai kaum dalam mewujudkan keharmonian berpuca daripada corak

kepimpinan bersepadu yang dilaksanakan.

Katanya, kestabilan politik serta peningkatan ekonomi juga dapat diwujudkan walaupun masyarakatnya mempunyai corak kebudayaan serta pegangan agama yang berlainan.

Beliau berkata demikian semasa merasmikan Majlis Penyerahan Anak Angkat Sempena Program Lawatan Belia Kagoshima dan Kumamoto ke Kelantan di Sekolah Menengah Beris Panchor dektah sini semalam.



SEBAHAGIAN pelajar Jepun cuba melukis batik di majlis penyerahan mereka sebagai anak angkat di Sekolah Menengah Beris Panchor, Bachok kelmarin.

Menurut beliau, berbanding negara-negara yang mempunyai keturunan dan agama yang sama, negara ini terserlah keunikannya kerana masyarakatnya terdiri dari berbagai agama dan keturunan.

Toleransi

"Semua golongan masyarakat menunjukkan sifat toleransi yang tinggi dan ini membantu kerajaan mewujudkan corak pemerintahan yang boleh diterima oleh semua pihak," katanya.

Katanya, tidak seperti negara-negara yang mempunyai bangsa dan agama yang sama, tetapi keamanan dan keharmonian tidak tercapai.

Itu juga, katanya, menyebabkan ramai pemimpin luar datang melawat negara ini untuk melihat dan mencontohinya keadaan tersebut.

Dalam hubungan itu juga, katanya, semua pihak perlu sedar bahawa pewujudan keadaan tersebut berpunca daripada komitmen pemimpin Melayu

yang berusaha ber-sungguh-sungguh untuk mewujudkan suasana ber-kenaan.

"Pemimpin-pemimpin sekarang dan masa dahu-lu menghadapi pelbagai cabaran dalam usaha me-wujudkan suasana seperti yang dinikmati sebagai-mana hari ini," katanya.

Beliau memberitahu, berpunca dari corak ke-pimpinan itu juga membo-lehkan rakyat menjalani kehidupan yang aman dan damai seterusnya semua wawasan kerajaan untuk mewujudkan sebuah noga-ra makmur akan tercapai.

PENYEBAR FIKIRAN RAKYAT

Utusan

MALAYSIA

UTUSAN MALAYSIA ■ KHAMIS 3 OGOS 1995

Pelajar Jepun gembira dapat layanan istimewa

BACHOK 2 Ogos — Sebanyak 18 pelajar Jepun yang menyertai Program Anak Angkat anjuran Majlis Belia Kelantan (MBK), menyifatkan sambutan masyarakat tempatan terhadap kehadiran mereka amat menarik dan menyenangkan.

Menurut mereka, walaupun masing-masing belum mengenali di antara satu sama lain sebelum ini, tetapi masyarakat tempatan menerima mereka dan memberi layanan yang istimewa.

Kata mereka, sebagai contoh, persembahan seni silat dan menaikkan wau adalah antara acara menarik yang diadakan khas bagi membolehkan mereka mengetahui corak kebudayaan sebenar masyarakat di negeri ini.

Salah seorang yang ditemui, **Reina Matsuzaki**, 16, berkata, beliau terpesona dengan sambutan yang diberikan walaupun kurang memahami pencerangan itu.

"Tetapi saya suka melihat semua persembahan itu kerana ia merupakan pengalaman pertama menyaksikan luar dari negara Jepun," katanya.

Beliau ditemui selepas Majlis Penyerahan Anak Angkat sempena Lawatan Belia Kagoshima dan Kumamoto ke Kelantan anjuran Majlis Belia Kelantan di Sekolah Menengah Beris Panchor dekat sini semalam.

Majlis penyerahan itu dirasmikan oleh Timbalan Menteri di Jabatan Perdana Menteri, Datuk Nazri Tan Sri Aziz, yang turut dihadiri oleh Yang Dipertua MBK, Ibrahim Mat Din, Ketua UMNO Bahagian Bachok, Ahmad Shahibuddin Mohd. Noor dan Timbalan Pengarah Belia dan Sukan Negeri Kelantan, Shaari Salleh.

Seorang lagi, **Sasaki Hirotaka**, 15, berkata, beliau gembira terpilih untuk menyertai program itu dan



JUNICH



SASAKI HIROTAKA



NATSUMI TABIRA



REINA MATSUZAKI

akan cuba mendapatkan sebanyak banyak peluang untuk mengikuti corak kehidupan masyarakat di negeri ini.

Menyelami

Baginya, katanya, menyelami kehidupan masyarakat Melayu di negeri ini merupakan satu pengalaman dan kenangan semur hidup untuk masa akan datang.

Junich Kamihagihara, 18 dari sekolah Kokubu, menyifatkan, masyarakat Melayu mempunyai corak kehidupan yang unik.

Ditambah dengan nilai-nilai tradisi sebagai mana masyarakat tempatan

yang lain, katanya, mereka mempunyai hubungan kekeluargaan yang rapat.

Sebagai anak angkat, katanya, beliau dilayan seperti anak sendiri tanpa sebarang kekurangan.

Natsumi Tabira, 15, dari Nakatane, berkata, beliau berbesar hati dapat menyertai program lawatan ke negeri ini dan menjadi anak angkat kepada sebuah keluarga Melayu.

Katanya, beliau akan cuba menyesuaikan diri dan mendapatkan serba sedikit kelabaran mengenai corak kehidupan serta peribadi dan makanannya.

テリマ カシ コタ バル

Terima Kasih Kota Bharu

第 5 回 鹿児島県青少年海外協力体験事業報告書

編集発行 鹿児島県青少年海外協力体験事業実行委員会

平成 7 年 10 月 20 日 発行